

2 1	西 尾	東部中学校	ツゲ イットク
			柘植 一徳

分科会番号	特	分科会名	「特別の教科道徳」 特別分科会
-------	---	------	-----------------

研究題目

物事を多面的・多角的に捉え、道徳的価値について、自分の考えを深められる生徒の育成
～ 1 年生「生命の尊さ」を追求する 道徳科の実践を通して～

研究要項

1 主題設定の理由

東部中学校は一昨年度、研究主題「青空の広がる東中生の育成」のもと道徳、総合、特活を核とした新しい東中文化の創造に取り組んできた。3 年間の研究の中で、授業の山場の定義や生み出し方、深まりの一手のねらいや手法、講じるタイミングなどさまざまな視点で協議を重ねてきた。道徳部会では、内容項目 D により重点をおき、実践を重ねる中で教師の中心発問からの授業の山場において、抽象的な意見やきれい事のような表層的な意見を深めていくことで、そこから道徳的価値の本質にまで迫り、実生活に生かそうとする生徒の育成を目指してきた。しかし、板書構造、発問の仕方などの基本的な授業の型が確立されてきた一方で、それがどの教材にも適しているのか、特に深まりの一手の内容やタイミングについては今後も検討すべき課題として残る結果となった。そこで、学習指導要領の道徳科の目標にも示されているように、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考えられるよう、生徒の実態や教材に応じた教師の支援としての「授業の型」を準備・工夫することで、生徒が道徳的価値をより深く捉えられるようになるのではないかと考えた。

本実践の対象となる 1 年生の生徒は、活発に自分の意見を級友に発表することができる。ただ、日頃の生徒の言動と道徳の授業での発言の内容が一致しないことが多い。一般常識として人はどうあるべきか、なぜそのように考えるのかという道徳的価値の本質まで考えを深めることができているためだと考えられる。これからの社会を担う一員として、生命の尊さをどのようなところに見いだすのか、なぜ人は生命を大切にしていこうとするのかということに気づき、自分なりに生命を尊重していこうとする生徒に育ってほしいと考えた。そこで、D 項目の中から「生命の尊さ」により重点を置き、自他の生命の尊さについてその根底にある道徳的価値にまで考えを深める生徒の育成を目指し、研究実践に取り組むことにした。

2 研究の方法

(1) 目指す生徒の姿

生命を尊いと感じる心の根源に気づき、自他の生命を大切にしていこうとする生徒

本研究では、D (19)「生命の尊さ」に重点を置き、「生命は大切にしなければいけない」「生命は平等である」といった表層的な意見の羅列で終わるのではなく、「どうして生命は大切にしなければいけないのか」「本当に生命の大切さ、価値の重さに違いはないのか」といった道徳的価値にまで迫った話し合いを展開していきたい。その話し合いを人間が生命を尊いと考え、心の根源に気づくきっかけとし、生徒がこの先の人生の中で「自分だけでなく、人間を含めた全ての生命を大切にしていきたい。そのためにはどうすればよいのだろうか」という行動意識にまで思考を深めていきたい。

(2) 研究の仮説と手だて

目指す生徒の姿に迫るため、次のように仮説を立てた。

教材の選択や深まりの一手の手法を工夫することで、生命の尊さについての道徳的価値の理解を深めるきっかけとなり、自他の生命を大切にしていこうとする生徒が育つだろう。

目指す生徒の姿の具現化に向け、次の2つの手だてを展開した。

【手だて1：深まりの一手の内容や手法の工夫】

授業の山場を充実させるための教師の手だてである深まりの一手を、従来通りの教師からの切り返し発問のみならず、その他の手法も用いることで、生徒の思考の活性化をねらう。

【手だて2：教材選択の工夫】

生命の尊さ（項目D）に重点を置き、一年間考えを深めていく中で、生徒が教材の世界観に浸れたり、自他の生命について自分事として考えたりできるように、教科書教材以外の教材も必要だと判断できれば採用する。

(3) 抽出生徒の設定

本研究では、「きみがいちばんひかるとき（光村図書）」に掲載されている「ひまわり」と、「トゥーヴァージンズ」出版の絵本「ある犬のおはなし」の授業を取り上げる。これらの1年生の実践をもとに、学級全体を見ながら生徒Aの変容を追い、取り組みの様子、発言の内容、振り返り用紙の記述などから手だての有効性を比較検証していく。

【生徒Aについて】

生徒Aは、普段の生活で誰に対しても気さくに話しかけることができる。学級の中心的存在でもあり、道徳科の授業では自分の意見を堂々と発表できるだけでなく、教師からの問いかけや級友の意見に迷って、心が揺らいだ時には首をかしげるなどの反応を見せることが多々ある。しかし、思ったことをすぐに口に出してしまうことも多く、級友と言ひ合いになったり、傷つけてしまったりすることも少なくない。

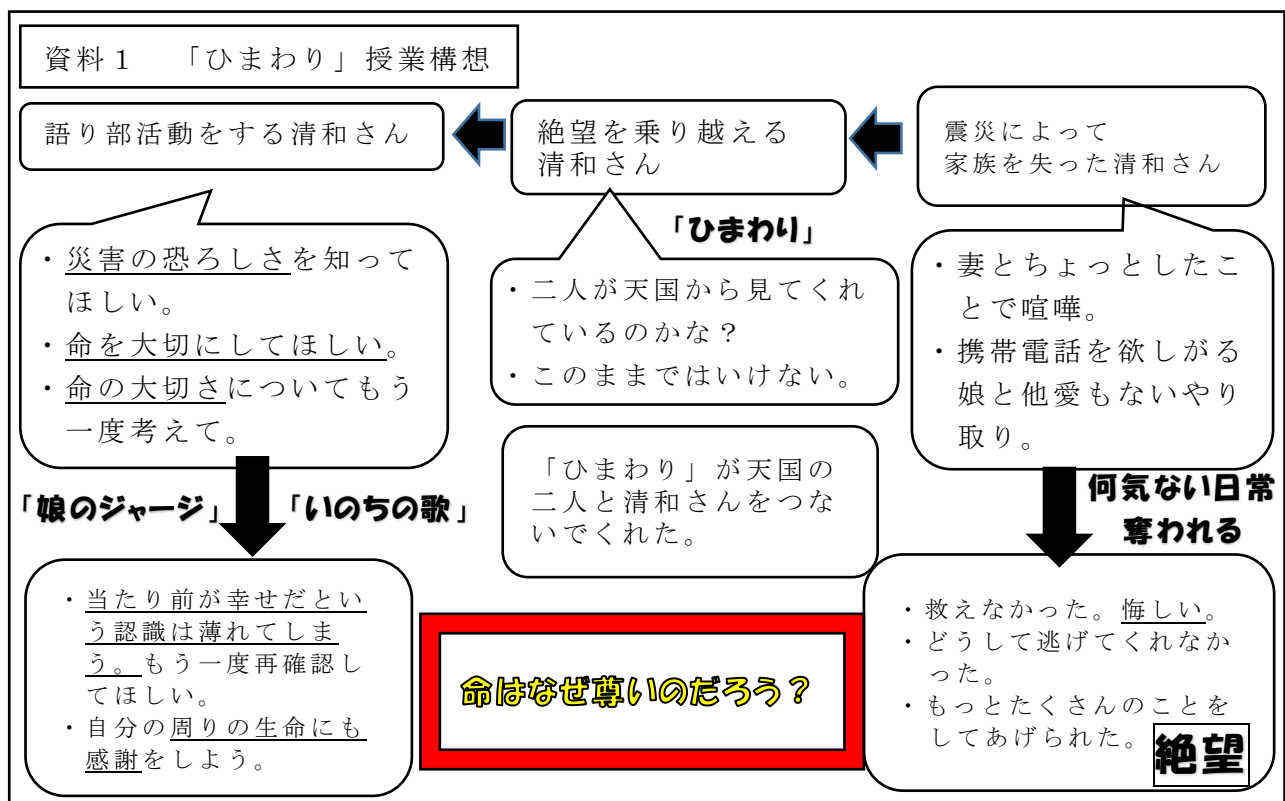
本実践を通して、自他の生命の尊さに気づき、これまで以上に大切に扱っていこうとする心情を高めていきたい。

3 研究の実践と考察

生命はなぜ尊いのだろう 「ひまわり」の実践 （D－生命の尊重）

（1）あらすじやねらいについて

本教材は東日本大震災により妻と娘を失った佐々木清和さんが、大切な家族を一瞬で失った悲しみを乗り越え、語り部として自分の体験や感じたことを発信していく姿について書かれている。家族と他愛もない会話をしたり、喧嘩をしたりするごく普通の生活が震災による津波で一瞬にして奪われてしまったときの絶望感をどのような思いで乗り越えて語り部として活動を始めたのか。また、語りの中で本当に伝えたいメッセージはどのようなことなのかを考えさせられる内容となっている。清和さんと亡くなってしまった妻と娘の和海さんをつなぐ存在であるひまわりや、津波の影響でぼろぼろになってしまった和海さんの学校のジャージ、語りで必ず聴いてもらうようにしている「いのちの歌(竹内まりあ)」など、清和さんが伝えたいことを考えるための手がかりが多く散りばめられている。



(2) 山場の様子 (手だて1の検証)

範読をした後、「津波で家族を亡くした清和さんはどんな気持ちだっただろう」と補助発問をし、清和さんにも家族と会話したり、喧嘩したりするごく普通の日常があったことや、津波によって一瞬で家族の命を奪われてしまった絶望感や人間の命はふとしたことで簡単に終わりが来てしまうということにふれた。その後、ひまわりによって天国の家族とつながることができたことをきっかけに絶望から立ち直り、語り部としての活動を始めたことを確認した。そのうえでT「清和さんが語り部をはじめたのはどうしてだろう」と中心発問を投げかけた。(資料2)すると、C1「震災の恐ろしさを忘れないでほしいから」、C2「一瞬で命を奪う震災の恐ろしさを伝えたいから」といった人間の生命は自然には敵わずふとした瞬間に簡単になくなってしまふ、その瞬間はいつ来るかはわからないといった人間の生命のほかなさについての意見が出た。それに続いて生徒A「命についてもう一度考えてほしいから」というぼんやりとした表現の意見が出た。それに対してT「命のどんなことについて考えてほしいの」と問うと、C3

T : 清和さんが語り部をはじめたのはどうしてだろう。(中心発問)

C1 : 震災の恐ろしさを忘れないでほしいから。

C2 : 一瞬で命を奪う震災の恐ろしさを伝えたい。

生A : 命についてもう一度考えてほしいから。

T : 命のどんなことについて考えてほしいの？

C3 : 命が失われるととても悲しいこと。

C4 : 命は自分だけのものではないこと。

C5 : 命の大切さについて考えてほしい。

T : 清和さんのいろんな思いが考えられるね。その中でも特に伝えたかったことは何だろう。

(沈黙)

T : 清和さんは語りの最後に「いのちの歌」を聴いてもらうんだよね。みんなで聴いてみる？

(深まりの一手：いのちの歌)

生A : 命っていうとどうしても「自分の命が」と考えてしまうけど、自分の周りにもたくさん命があってすべてを大切にしてほしいということかな。

C6 : 人は生まれた時から、誰かに支えられて生きていること。一人の命ではないこと。

C7 : 難しいことだけど、毎日普通に過ごせることを当たり前だと思っはいけないこと。

資料2 「ひまわり」授業記録

「命が失われた時の悲しみ」やC 4「命は自分だけのものではないこと」C 5「命の大切さについて考えてほしい」という意見が出た。そこでT「その中でも特に清和さんが伝えたかったことは何だろう」と問うと、生徒はしばらく黙り込んで考えた。ここで深まりの一手として「いのちの歌」の歌詞に浸りながら曲を聴く時間を設けた。曲が終わると生徒は挙手をし、生徒A「命っていうとどうしても『自分の命が』と考えてしまうけど、自分の周りにもたくさん命があってすべてを大切にしてほしいということ」という、自分の命に注目して考えていた視点が、自分の身の回りに生きている命に対しても広がったことがわかる意見が出てきた。その他にも、その身の回りの命と自分の命はお互いに支え合って生きていることや、当たり前を感じている普通の日常が実は幸せなことといった意見が出てくるようになり、深まりの一手で歌詞についてじっくり考える時間を設けたことで、「いのちの歌」の歌詞が生徒に響き、「命は大切にしなければならない」といった表層的な意見から、「自分の命とその他の命とがお互いにつながって支え合って生きている」というような本時のねらいとする道徳的価値の本質に関わる意見へと深まる結果となった。

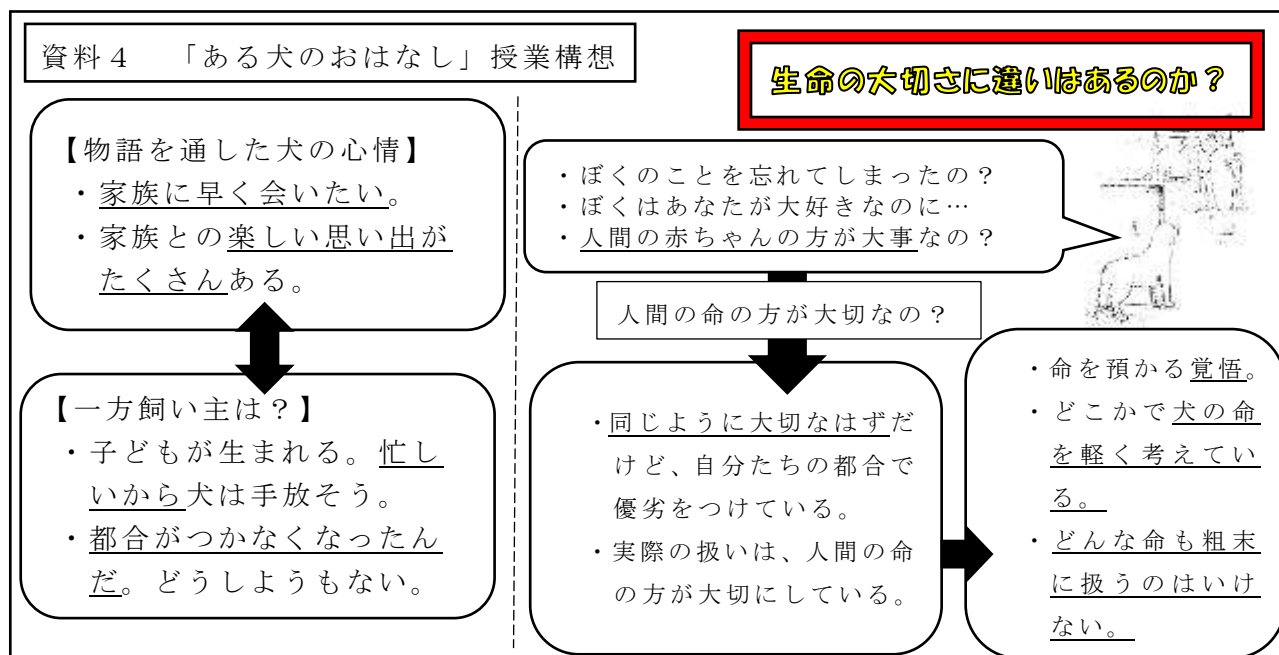
生徒Aの授業後の振り返り（資料3）には、自分の命とそれを生み出し支えてくれる周りの命とのつながりについての記述が見られた。授業中では、「命の大切さ」という抽象的だった意見を、深まりの一手によって自分の周りの命に視点が向き、「命の大切さ」についてより深く思考をはたらせることができた。特に、内容項目D「生命の尊さ」では、普通に生きているとあまり考えることが少ない「生命」についてじっくり考える時間を生み出すことをねらっている。音楽の歌詞に浸ることで、生徒の心を揺さぶり、生命について真剣に考える雰囲気づくりをするだけでなく、道徳的価値をより深く捉えることができるようになった。よって、手だて1は人間の生命の尊さを考えるにあたり、生徒の思考の活性化を図る手だてとして有効的にはたらいといえる。

自分の命も親からもらった命だし、友達や先生など多くの人に支えてもらって今の自分があると考えさせられました。もし自分の命がなくなれば周りの人は悲しむだろうし、自分以外の命がなくなるとは自分の命がなくなるのと同じくらい悲しいと思うので今まで以上に大切にしていきたいと思います。

資料3 「ひまわり」生徒A振り返り

生命の大切さに違いはあるのか 「ある犬のおはなし」の実践（D－生命の尊重）

（1）あらすじやねらいについて



本教材は、犬が飼い主に選ばれる場面からはじまり、飼い主の都合により施設へ入れられ、殺処分を受けるまでの姿を描いた絵本である。シンプルな挿絵が多くあり、犬が飼い主から捨てられて尚、信頼を寄せて施設で待ち続ける姿や殺処分を待つ様子から、不安な気持ちや緊張感が直接的に伝わる作品となっている。人間と犬の生命の大切さの関係性について考えさせられるのではないかと考えた。(資料4)

(2) 山場の様子(手だて2の検証)

教材範読は、絵本の特性を生かし「読み聞かせ」で行った。(図1)机を移動し、教室中央のスペースに生徒を集めて行った。挿絵をじっくり見る時間をとったり、生徒のつぶやきを拾ったりしながら範読を進めた。生徒の心へ直接的に訴えてくるシンプルな挿絵になっているため、生徒Aは範読を聞きながら涙する様子が見られた。施設へ連れていかれた犬が「柵の前で何を考えていただろう」、「飼い主に犬の気持ちは届いているかな」と補助



図1 読み聞かせの様子

発問をし、犬と人間の気持ちのすれ違いを押さえたところで、中心発問としてT「天国から楽しそうに暮らす家族を見てどんな気持ちだったかな?」と問いかけると(資料5)、生徒A「もうぼくのことを忘れてしまったのかな」と、犬の立場になって犬の心の声を意見した。それに続いてC8「あなたにとって僕は大事ではなかったんだ。」、C9「人間の命の方が大事なんだ。」と、同じように犬の心の声を表現することができた。そこで教師は深まりの一手として、**飼い主が人間の子どもを高く掲げるシーンを確認し、T「犬の命よりも人間の命の方が大切なのか」と切り返し発問をした**。しばらく個々で静かに考え込んだ後、C10「命の大切さに違いはないはず」、C11「どの命も平等に扱われるべきだ」という人間と犬の命の大切さの関係はイコールの関係にあるといった意見が続いた。そこで補助発問としてT「でもこの犬の扱いは全然平等ではないよね?」と問うと、C12「自分の血のつながった家族か犬どちらかの命を選ぶとしたら家族を選ぶと思うから、実際は人間の命の方が大事なのかかもしれない」と、今の自分の価値感から本音で意見を述べる生徒が現れた。その意見に対して生徒A「人によって考え方は違うけど、私は犬を飼っていて、犬が好きすぎて人間の命の方が大切なんて言えない。命を預かるって決めたなら最後寿命を迎えるまで大事にしてあげなければい

T :天国から楽しそうに暮らす家族を見てどんな気持ちだったかな?(中心発問)

生A : もうぼくのことを忘れてしまったのかな。

C8 : あなたにとって僕は大事ではなかったんだ。

C9 : 人間の命の方が大事なんだ。

T : この絵を見ると人間の赤ちゃんを抱きあげているね。犬の命よりも人間の命の方が大切なのか?(深まりの一手)

C10 : 命の大切さに違いはないはず。

C11 : どの命も平等に扱われるべきだと思う。

T : でもこの犬の扱いは全然平等ではないよね?

C12 : 自分の血のつながった家族か犬どちらかの命を選ぶとしたら家族を選ぶと思うから、実際は人間の命の方が大事なのかかもしれない。

生A : 人によって考え方は違うけど、私は犬を飼っていて、犬が好きすぎて人間の命の方が大切なんて言えない。命を預かるって決めたなら最後寿命を迎えるまで大事にしてあげなければい

資料5 「ある犬のおはなし」授業記録

また、生徒 A の授業後の振り返り（資料 6）には、犬（ぼく）へのメッセージを記述した。自分が犬を飼っている経験から、実際に日本で起きている実態に疑問を投げかけるような記述や命を預かる責任や覚悟など、自分だけでなく周りの人にも同じ思いをもってもらいたいという強い意志が感じられる記述が見られた。

手だて 2 について、生徒の実態の見取りや授業構想から教材を柔軟に変更したこと

は、生徒が教材の世界観に浸り、自他の生命について自分事として考えを深めることができた。また、挿絵を板書や発問の際に活用することで、より犬の立場に立って意見を考えることにつなげることができた。よって手だて 2 は有効であったといえる。

私はすごく疑問に思います。「捨てるならなぜ飼うの？」と。「最後まで一緒にいられないのなら飼わないでほしい」と思います。「動物を飼う」ということは、「自分が責任をもって最後まで一緒にいる」という気持ちを決めてから行動に移してほしい。

資料 6 「ある犬のおはなし」
生徒 A 振り返り

4 研究の成果と今後の課題

（１）研究の成果

本研究では、様々な生命尊重の形について考えを深めていくために「深まりの一手の手法」と「教材選択の工夫」を大きな手だてとして実践に取り組んだ。

深まりの一手の手法については、昨年度までの研究発表の成果からも道徳科では繰り返し発問が基本の手だてにはなると考える。だが、内容項目 D に関しては本実践のような、曲を聴くなど、生徒の心を直接揺さぶるような場の設定が有効であるとわかった。本実践の曲を聴くという手だては、曲のメロディによって授業の余韻を生み出すことにもつながったり、歌詞が直接的に生徒の思考に影響を与えたりする結果となった。

教材選択の工夫では、教科書教材の代わりに絵本を採用した。道徳科の学習指導要領解説によると、多様な教材を活用した創意工夫ある指導が求められている。生徒の実態の見取りや、授業でねらいとする道徳的諸価値に迫るために必要であれば、教材を適宜変更することができる。特に、絵本の採用に関しては、教科書の「動物の命—私たちにできること」で、殺処分数のデータや保護団体で活動する人の話から人間以外の命について考えていくよりも、読み聞かせの範読で絵本の世界感に浸り、挿絵の犬の表情や絵のタッチから殺処分を待つ犬の立場に立って心情理解を行うことで、ただ単に「人間の命も動物の命も大切だ」という表層的な意見でなく、「実際は人間の命の方が大切だろう」といった生徒の素直な意見や「命を扱う責任を感じてほしい」という強い思いが意見として現れることにつながった。今後も教材選択をねらいに迫るために必要であれば柔軟に工夫していきたい。その際、生徒の興味を引くことだけにとらわれないようにしたい。

（２）今後の課題

本研究でも重点を置いた深まりの一手を授業全体のどのタイミングで講じるべきかという課題は今後も残る結果となった。深まりの一手は本校の捉えとして「授業の山場を充実させるための教師の手だて」という位置づけとなっている。中心発問後の生徒の話し合いの時間を長く確保し、展開後段で深まりの一手を講じる方がよいのか、ある程度話し合ったら早めに深まりの一手を講じる方がよいのかは今後も授業実践を重ね、追究していきたい。本実践では、深まりの一手を講じた後に生徒の思考が深まる場面が多く見られたため、深まりの一手後の時間を長く確保する方が有効であるのかもしれない。今後の研究へつなげていきたい。